

# 近代における鬱陵島の鰺（スルメ）産業と隠岐島

森 須 和 男

はじめに

1. 鬱陵島におけるイカ漁の創始
  2. 鰺への加工法
  3. 漁船
  4. 流通
  5. 鬱陵島における明治 39（1906）年から大正 7（1918）年頃にかけてのイカ漁の様子
  6. 漁具・漁法
  7. 鬱陵島漁業組合
  8. 人口の変化
  9. 鬱陵島の運輸交通
- おわりに

## はじめに

韓国鬱陵島（うつりょうとう・ウルルンド）は、面積が 72.82 平方キロメートル、周囲が 56.5 キロメートル、東経 130 度 54 分、北緯 37 度 29 分に位置するホームベース型の地形をした火山島である。韓国東海岸の蔚珍（ウルジン）よりは東に約 140 キロメートル、竹島／独島（以下、竹島）からは北西に約 88 キロメートルの位置関係にある。2010 年度の人口が 10,701 人（ピーク時の人口は、1974 年度の 29,810 人）を数える、漁業と観光の島である。一方、隠岐島は、竹島より南東に 158 キロメートル、島根半島からは北に約 67 キロメートルの位置にある。鬱陵島と隠岐島間の距離は約 200 キロメートルである。

本稿では、鬱陵島のイカ漁や鰺への加工法、漁船・漁具・漁法、流通、運輸交通（帆船・汽船）、人口、社会構造、社会背景、自然環境などを、文献資料及び関係する地域での聞き取り調査等により検討し<sup>1</sup>、近代において鬱陵島と隠岐島がどのような関係を持ち、現

---

1 本研究に関わる先行研究としては、朝鮮水産全体からみた、吉田敬市『朝鮮水産開発史』朝水會、昭和 29 年、鬱陵島の近代史を網羅的に研究した、福原裕二「20 世紀初頭の鬱陵島社会」『北東アジア研究』第 21 号、2011 年 3 月、福原裕二「20 世紀前半の鬱陵島各種統計（第 1 版）」『北東アジア研究』第 21 号、2011 年 3 月、福原裕二「植民地朝鮮期の鬱陵島日本人社会」『総合政策論叢』

在の鬱陵島のスルメ産業に影響を及ぼしたかを明らかにしたい。

## 1. 鬱陵島におけるイカ漁の創始

### (1) 鬱陵島外の日本人

日本の外務省が作成した「竹島へ出漁ニ罷渡候由探索」『朝鮮事務書巻九』（明治四年）<sup>2</sup>には、「石州用達躰ノ役人式人町人壺人長崎町人鍛冶屋町石屋某舟大工町山城屋某ノ五人頭取ノヨシ右海士式十五人召連同島ニ渡リ鮑烏賊ヲ漁シ候ヨシ」とあり、1871年にはすでに日本人が竹島（現在の鬱陵島を指す）近海でイカ漁を行っていたことが分かる。

### (2) 鬱陵島における日本人寄留者

島根県内務部『島根県漁業基本調査報告書（漁村調査）上巻』（大正3年3月31日）<sup>3</sup>によると、隠岐島の浦郷村からは明治20（1887）年、加茂からは明治25（1892）年にイカ漁船の一団が鬱陵島近海へ出稼漁業に赴き、その根拠地を鬱陵島とし、数か月間をそこで過ごして隠岐島に帰帆していることが記述されている（表1）。

また、島根県水産試験場『隠岐近海二番柔魚漁業調査報告』（大正14年8月20日）<sup>4</sup>によれば、大正3（1914）年より不漁の原因調査を開始し、大正9（1920）年～11（1922）年にかけて基本調査を実施していることが記されている。ここでは、報告者により隠岐における二番柔魚スルメの不漁要因についての見解が示されており、大正3（1914）年から大正4（1915）年にかけて漁獲がとみに減少、漁村においては「著しく疲弊困憊し漸次他業（農業、出稼人、他縣へ転住）に轉ずるの窮状にある」と報告している。同書ではさらに、二番柔魚の豊漁・不漁の周期を3～4（4～5）年とし、不漁の原因は、海洋の変化、山林の荒

---

第25号、2013年2月、竹島＝独島問題からみた、朴炳涉「明治時代の鬱陵島漁業と竹島＝独島問題（1）」『北東アジア文化研究』第31号、2010年3月、朴炳涉「明治時代の鬱陵島漁業と竹島＝独島問題（2）」『北東アジア文化研究』第32号、2010年10月、隠岐漁民からみた、児島俊平「隠岐漁民の竹島（鬱陵島）行」『郷土石見』第21号1988年8月などがある。また、戦前における長崎県のイカ漁・イカ産業について、他地域（隠岐、島根県を含む）と比較研究を試みた、片岡千賀之「戦前における長崎県のイカ釣り漁業とスルメ加工の展開」『長崎大学水産学部研究報告』第82号、2001年3月などもある。

2 「竹島へ出漁ニ罷渡候由探索」『朝鮮事務書巻九』（明治4年）[http://db.history.go.kr/front/dirservice/ibrowser/searchIpqData.jsp?pItemCode=sml&pStartPg=sml\\_ms\\_00209\\_0033&pEndPg=sml\\_ms\\_00209\\_0034](http://db.history.go.kr/front/dirservice/ibrowser/searchIpqData.jsp?pItemCode=sml&pStartPg=sml_ms_00209_0033&pEndPg=sml_ms_00209_0034)。

3 島根県内務部『島根県漁業基本調査報告書（漁村調査）上巻』報光社、大正3年3月31日、7-379頁。

4 島根県水産試験場『隠岐近海二番柔魚漁業調査報告』松陽新報社、大正14年8月20日、1、151-152頁。

表1 鬱陵島への出稼ぎ漁業（明治44年～大正2年）

島名	地名	組合区	隠岐漁業組合	種類	出稼の時期	漁船隻数*	出稼人員数*	根拠地	漁場	出稼創始期	
島後	西郷町	1	西町	柔魚釣	5～9月	7	31	鬱陵島	其沿岸	従来	
		1	中町	柔魚釣	—	3	14	“	“	従来	
		1	東町	柔魚釣	—	5	21	“	“	従来	
			7	加茂	柔魚釣	大概5～10月 (6ヶ月間長きは1ヶ年又は2ヶ年)	2・3	4・5 (1船あたり)	“		明治25年頃
			7	箕浦	柔魚釣	6～10月	1	6	“	“	—
			7	岸濱	柔魚釣	6～9月	1	6	“	“	明治44年
			7	今津	柔魚釣	6～10月	1	6人位	“	“	明治44年
島中	中ノ島	8	海士	柔魚漁業	3、4月頃～ 8、9月頃	—	15	鬱陵島 道洞	—	近年	
		9	知々井	柔魚釣	6～10月	3	15	“道洞	—	近年	
		9	太井	柔魚	春夏秋	—	10	“ ”	—	—	
		9	布施	柔魚	春夏初秋	—	7	“ ”	—	—	
		9	崎	鬱陵島 柔魚	春夏初秋	—	5	“ ”	—	—	
島前	西ノ島	10	宇賀	柔魚	6～10月	26	143	鬱陵島	近海	10数年前	
		10	別府	柔魚釣	6～10月	6	32	“	其沿海	10数年前	
		10	美田	柔魚釣	6～10月	31	175	“	其近海	“	
		11	浦郷村	柔魚釣 採藻	4～10月	12	60	“	“	明治20年	
	知夫島	12	知夫村	柔魚釣	5～9月	2	35	“	其沿海	—	

出所：島根縣内務部『島根縣漁業基本調査報告書（漁村調査）上巻』大正3年3月31日、7-379頁の記載他から作表。

注：「\*」は最近5か年平均。〔-〕は記載なし。

廃（塩分濃度）、汽船及び帆船の航行、発動機手繰船、トロール船、刺網、漁燈などとしているが、憶測の域を越えておらず、原因特定までには至っていない。

朝鮮総督府が編纂した『朝鮮彙報』（大正4年3月1日号）<sup>5</sup>によると、大正2（1913）年には、柔魚漁業鑑札が第2種266隻、第3種170隻に下附されたことが記されており、また大正3（1914）年には、臺霞洞・沙洞に90隻、長興洞・通龜尾・南陽洞に70隻の合計160隻が出漁し、その出港地は石見70・隠岐40・伯耆20・出雲10・兵庫縣8・山口縣

5 「慶尚北道鬱島水産状況（慶尚北道報告）」『朝鮮彙報』朝鮮総督府、大正4年3月1日、79-87頁。

3・朝鮮内地（概して島根縣船で他の漁業に従事していた者が漁期になって渡航した）9隻であることが記載されている。それら「内地より出漁する漁船は各組を作り、大船頭と稱し總名代の如き者一人を置き、漁期と共に鬱島に来るや引受人となりて内地人所有に係る家屋を借入る、家賃は四疊半乃至六疊一間臺所土間付疊なしにて六月より十月に至る一期間、大抵二十圓位を相場とす」との様子も併せて描かれている。

つまり、隠岐島の人々も、隠岐島近海でのイカ漁の不振に喘いだ折、鬱陵島近海でイカが豊漁との噂話を聞き、出漁するようになり、さらにイカを加工するためには、島に上陸する必要が生じ、寄留するようになったのである。

### （3）鬱陵島における日本人居民

日本の外務省通商局が編纂した『通商彙纂 第234号』（明治35年10月16日発行）<sup>6</sup>には、鬱陵島の「本島物産」として鰺が登場している。また文中には、「9月以降は常に風波激烈にして航海すること能はざる」との記載がある。小型漁船では、9月以降になると遭難の危険性が高くなるため、鬱陵島へ渡島する際に乗って来た漁船を朝鮮人らに売ったり（鬱陵島では漁船の絶対数が不足し、中古船でも日本で売るより高値で売れた）、毎年鬱陵島へ渡島する者は島に漁船を預け置き、汽船で帰国したりしていたが、そのうちにそのままそこへ不法居住する漁業従事者（家族・雇用者とともに）も現れるようになった。

### （4）鬱陵島における朝鮮人居民

韓国統監府農商工部水産局が作成した『韓國水産誌 第2輯』（隆熙4年5月5日）<sup>7</sup>には、「烏賊は……光武七年（明治三十六 [1903] 年）日本人漁獲を始めし處にして島人これに習ひて捕ふるに至りしは今より三年前なり」とあって、朝鮮人居民のイカ漁受容の事情を窺うことができる。同書によれば、当時鬱陵島に存在した漁船は、島人所有の普通帆船30隻、海藻採取用小舟200隻、日本人所有の漁船120隻と明記されている。

また、『通商彙纂 第貳號』（明治39年1月13日）<sup>8</sup>には、明治38（1905）年12月6日付の在釜山帝國領事館報告として、「一、烏賊 輸出重要品ノ一ニシテ韓人ノ漁獲スルモノナク本邦人ノ専漁スル所ナリ」と記述されている。以上の資料を勘案すれば、鬱陵島における朝鮮人のイカ漁の創始は、1906年から1907年中のことと考えられる。

---

6 「韓国鬱陵島事情」外務省通商局編纂『通商彙纂』第234号、元眞社、明治35年10月16日、43-51頁。

7 農商工部水産局編纂『朝鮮水産誌 第二輯』龍山印刷局、隆熙4年5月5日、706-717頁。なお、「隆熙」は大韓帝国の元号で、隆熙4年は、日本の元号で明治43年、西暦で1910年にあたる。

8 「韓国鬱陵島事情」外務省通商局編纂『通商彙纂』明治39年第2号、博文館、明治39年1月13日、27-35頁。

## 2. 鯛への加工法

平城京二条大路跡発掘の木簡に、天平7（735）年隠伎國周吉郡新野郷丹志里宗我部阿久多調烏賊六斤とあり、奈良時代にはすでに、スルメは隠岐島の特産品となっていた<sup>9</sup>。

### （1）隠岐島

大日本水産會が著した「第三回内國勸業博覽會第四部審査概評」『大日本水産會報告 號外』（明治23年9月24日）<sup>10</sup>によれば、明治23（1890）年に東京・上野で開催された「第三回内國勸業博覽會」において、隠岐島の鯛は高い評価を得ている。すなわち、一等進歩賞に島根県隠岐国周吉・穩地両郡の水産物製造同業組合の「二番尾吼鯛輸出荷造包」が選ばれ、二等には知夫郡及び海士郡水産物同業組合の「二番尾吼鯛荷造一個」が、三等有功賞には周吉郡布施村の個人2名の「二番尾吼鯛」がそれぞれ賞を受けた。また、明治26（1893）年に大阪市で開催された「第一回關西九州府縣聯合水産共進會」においても、隠岐島の鯛は一等金盃を受け、加えて明治28（1895）年に京都で開催された「第四回内國博覽會」では有功一等賞を得た。さらに、設立間もない隠岐水産組合は、島根縣内務部第五課『第二回水産博覽會報告』（明治31年4月9日）<sup>11</sup>によれば、明治30年に神戸市で開催された「第二回水産博覽會」において、「二番鯛」が名誉銀牌、「鯛壓搾器」が三等有功賞を受賞している。その上、明治33（1900）年の「關西府縣聯合共進會」では一等賞金牌、明治36（1903）年の大阪での「第五回内國勸業博覽會」では名誉銀牌、明治40（1907）年の「第二回關西九州府縣聯合水産共進會」では一等賞金盃を受賞している。

この背景には、次のような隠岐島各地の水産物製造同業組合の結成・組織統合が寄与しているものと思われる。すなわち、明治19年（1886）5月には、「農商務省令第七號漁業組合準則」が発出され、また明治20（1887）年5月には、島根県より農商務省に要請して水産局から派遣された「大日本水産會學藝員河原田盛美」の3か月にわたる「島根縣巡回指導」が大きな起因となって、明治20（1887）年10月に隠岐島・島後に「周吉穩地水産物製造同業組合」が、次いで隠岐島・島前に「中ノ島 海士郡水産製造同業組合」、「西

9 ふるさと読本編集委員会編『もっと知りたいしまねの歴史』島根県教育委員会、平成24年11月、18頁。

10 松原新之助編「第三回内國勸業博覽會第四部審査概評」大日本水産會『大日本水産會報告 號外』大日本水産會（製紙分社）、明治23年9月24日、1-2、15頁。

11 島根縣内務部第五課『第二回水産博覽會報告』第二回水産博覽會事務局、明治31年4月9日、26-27、50頁。なお、「二番鯛」とは、江戸時代長崎の俵物役所から清国へ輸出する際のスルメの品位の名称で、「磨上々番スルメ」、「磨剣先スルメ」、「一番スルメ（剣先スルメ）」、「二番スルメ」≡「尾吼スルメ」などがあり、「磨上々番スルメ」がもっとも高価であったが、「二番スルメ」の生産量が一番多かった。

ノ島 知夫郡水産物製造同業組合」が結成された。その後、明治29（1896）年には、それらが合併し「隠岐水産組合」が結成されることとなった<sup>12</sup>。なお、『明治37年 島根縣統計書』（明治39年8月18日）によると、明治36（1903）年3月3日に隠岐水産組合は設置認可されている。

こうした隠岐島各地の水産関係組合の組織化の過程や組織統合後における鰯を軸とした生産性向上のための努力を表す資料を挙げれば、次の通りである。

（a）佐藤屋文書（浜田市）<sup>13</sup>

『隠岐國水産共進會出品申告書』（明治21年4月）<sup>14</sup>

申告書 第479号 隠岐國周吉郡今津村 齋藤友太郎 鰯 方言「タラシ」ヲ以テ誘ヒ方言「コンガラ」ヲ以テ之ヲ釣タル 製法摘要 腹部ヲ縦斷シテ腸ヲ去リ清水ニテ洗滌シ竹竿ニ串ヌキ干ス 貯藏法 蘆類ニ包藏スルヲ可トス 荷造法 三拾二貫匁ヲ壺行李トシ蓆ニ纏フテ其外部ヲ繩束ス 販賣法 肥前國長崎港ニ長門國赤馬関ニ摂津國大阪府ニ伯耆國境港 一年年産額 五百束 一ヶ年販賣額四百八拾束 出品数二束 出品代價金六拾四錢
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

（b）隠岐水産組合の鰯に関する定款

牛尾軍太郎編『博覽會記念一名興産餘師』（明治37年7月5日）<sup>15</sup>

品位・製造法 スルメイカを正しく割捌き、水で丁寧洗淨する。生乾きは出荷しない。 結束及び荷造方 20枚を1束 200斤 = 1梱 = 24貫 量目適当な繩を用いる <sup>16</sup> 。 圧搾機で圧縮し蓆で梱包する。大小、精粗、季節の違うもの、色艶の違う物を混ぜない。
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

12 牛尾軍太郎編『博覽會記念一名興産餘師』（「隠岐水産組合沿革」）博廣社、明治37年7月5日、63-65頁。

13 本文書は、島根県浜田市佐藤茂樹氏が所蔵するもの。佐藤屋は、旧藩時代より浜田浦において糶（せり）問屋を営んでいた。その子孫の濱田魚糶會舎支配人佐藤嘉一郎高吉の時代の文書である。

14 同上文書中の河原田盛美の島根縣水産共進會審査官としての復命書（県知事宛）とともに綴じてあったもの。

15 前掲、『博覽會記念』84-95頁。

16 ただし、『明治32年 島根縣統計書』によると、二番鰯の場合、100斤 = 200枚とある。島根縣編『明治32年 島根縣統計書』島根縣、明治35年9月6日、110頁。

検査	組合事務所員による。
等級	甲（朱色）・乙（藍色）・雑（黒色）。形・大きさを揃える。
重量	測定する。
商標	検印する。
販売	清国向けに出荷。清国商は商標を信頼し、改造せずそのまま本国へ出せるようになった。

(c) 表2 大正7（1918）年隠岐水産組合製品検査高及成績 [品目：尾吼鯛]<sup>17</sup>

品位	本部			出張所			合計	
	梱数	量目（貫）	%	梱数	量目（貫）	%	梱数	量目（貫）
甲	545	105,500.	96	410	81,370.000	92	955	186,870.000
乙	16	3,200.	3	30	5,597.437	6	46	8,797.437
雑	6	1,200.	1	6	1,102.507	1	12	2,302.500
計	567	109,900.		446	88,069.937		1,013	197,969.937

以上の（a）（b）（c）の資料により考察すると、隠岐島各地の水産物製造同業組合が隠岐水産組合に組織統合されたことにより、製造・荷造・出荷方法などの技術面の向上と統一規格化が図られ、検査体制も整い、高品位の製品を多く出荷できるようになった。このため、博覧会等では高い評価を得ることとなり、隠岐島尾吼鯛の信頼度が日本のみならず清国に対しても高まっていった。

## (2) 鬱陵島

2008年8月、鬱陵島の亭洞港<sup>チヨ</sup>において筆者は、市民研究員制度を利用し、島根県立大学の大学院生崔志延（チェ・ジヨン）との共同聴き取り調査及び現地調査を敢行した<sup>18</sup>。その結果、鬱陵島における鯛製造の一連の工程は、現在も隠岐島方式<sup>19</sup>と同じ加工方法であることが判明した。ただし、スルメの結束方法については、現在観光客向けの見栄えの

17 「大正7年度隠岐水産組合業務成績報告書」隠岐島廳『大正十一年二番柔魚、鯖、鱈、鰹漁業基本調査資料』大正八年、各種綴じ込み中の1-2頁。

18 その詳細と成果は、崔志延『東海（トンへ）／日本海をめぐる韓日漁業の「共生」模索－韓国の鬱陵島（ウルルド）と隠岐の島を実例に』2010年度島根県立大学大学院北東アジア研究科修士論文、2010年9月（未刊行）にも記載されている。

19 隠岐島方式の加工方法は、スルメイカ（柔魚：アカイカ、シマイカ）を釣ったあと、なるべく早く胴を割り、内臓を取り去り、眼を取り除いて水洗し、女竹で尾吼（尾鰭）を貫き、架にかけ竹や麻の茎で眼孔のところに突っ張りを入れる。そうして脚を整えて乾燥させる。尾吼に穴が開いているので、尾吼スルメと称される。一連20尾で束ね、一梱200斤等規格を定め、組合をつくり品質検査して出荷した。

良い方法に変化してしまっており、隠岐島方式の伝播の事実を確認することができなかった。

しかし、先にも引用した「慶尚北道鬱島水産状況」によると、鬱陵島の鯛製造の一連の行程に関して、次のような記述が確認できる。やや冗長ではあるが、下に引用しておく。

「漁獲したる柔魚は其の數少きときは、船中に於て割截するも大抵は釣りたる儘陸上に運搬し婦女子は直に之か製造に著手す。其の法柔魚を左手に持ち掌上に於て腹筒を切り、銀白色の臓嚢を取去り眼球の上部より内臓の全部を除去すれば、柔魚串と稱する長さ七尺位一方より尖らしたる女竹を以て割たる柔魚の肉鱗と腹部の基部を貫き、二十尾を以て一連となし、串に刺したる儘海水にて洗滌し、汚物を除きマグラと稱する竹架に懸垂して乾燥す。マグラは杭を雙方へ竝立し其の間を六尺位となし上部に竹又は木を縦架結付たるものなり。マグラに架くれは、一方より口頭にハギと稱し二三寸の麻稈其他木、竹片等適宜のものを、恰も伸子を張りたるか如く入れ、又脚部を分離して乾燥に便ならしむ。斯くして耳と通稱する菱形の肉鱗を起し、二三時間の後之を立てて各部を十分乾燥す。夏期なれば朝乾燥に付したるものは夕刻串を外し箱又は板の角にて耳を延し、胴を上下伸展し形態を整正す、翌日筵又は簀上に於て更に乾燥し時時反轉し三日間にして製了す」<sup>20</sup>。

「製造したるものは縦に竝へ頭尾を揃へ各一方を組み重ね二十尾を以て一束とし、胴の中央を藁繩にて一重括とし、木製搾杵に入れ壓縮して長二尺一二寸、幅高一尺五六寸位の二十貫一梱に荷造す。夏季製のものに在りては一連二十尾の鯛重量二百三十匁より二百五十匁位、秋季製は稍大形なるを以て三百四五十匁より四百匁あり。隠岐に於て貿易市場に出荷するものは、何れも三十二貫即二百斤の荷造となすも、鬱島は舩の荷役本船の積込等大梱包にては取扱困難なる爲、便宜二十貫梱となし、境港に至り品種の検査を行ひ等級を附したる後更めて三十二貫梱となし輸出せらる。本島産の柔魚は所謂スルメイカにして、製品は悉く二番鯛とす」<sup>21</sup>。

このように、遅くとも大正4（1915）年頃の鬱陵島においては、製造法、荷造方法（船に積み込みやすい梱包量の変更があるものの）ともに、ほぼ隠岐島方式の鯛の加工技術が伝播していたと推察できる。

---

20 前掲、「慶尚北道鬱島水産状況」84-85頁。

21 同上、85頁。



### 3. 漁船

#### (1) 隠岐島

明治期中頃の隠岐島より鬱陵島へ渡島するための船の概要は、「山口縣阿武郡原田儀三郎調整の改良丸」を隠岐国四郡の共有漁船として新造したことを伝える『山陰新聞』の記事に見られる<sup>22</sup>。それによれば、知夫郡宇賀村の真野哲太郎がその改良丸を借り受け、4人乗りで鬱陵島へ向け出帆している。その途中で時化に遭い、数十回の浸水に見舞われたものの、無事5日間で鬱陵島に着いたと報じられている。

この記事に登場する原田儀三郎が明治16(1883)年の「水産博覽會」に出品した漁船は、甲板に波濤の侵入を防ぐ改良を加え、さらに後帆を加えて3帆としたことにより速度も増し、朝鮮海へ航行しても危険の憂いが少なくなったとして「第三回内國勸業博覽會」で進歩二等賞を得ている<sup>23</sup>。さらに、『第二回水産博覽會報告』は、船について「本縣において美濃郡水産業組合より同郡飯の浦漁業者の對州近海に出漁するに使用するもの一点ありその構造は山口縣の改良漁船に則りしものにて船首船尾に甲板を緊貼し左右に舷側板を設置して波濤を凌ぐ等専ら沖合出漁に便ならしめたるものにて蓋し遠海出漁の繩船として恐らく他に比類なきものなる」と記している<sup>24</sup>。

このように、改良船の発明により遠海への出漁に対する安全性が増したことは確かであるが、自然の力には勝てず、次のような悲しい遭難記録が残っていることも事実である。

#### 遭難記録 (a)

明治37(1904)年 朝鮮國鬱陵島沖合 日本形船小船 14隻 五百石未満 1隻<sup>25</sup>

#### 遭難記録 (b)

大正三年(1914年) 西郷港鬱陵島間 日本形船小船1隻<sup>26</sup>

#### (2) 鬱陵島

同時期の鬱陵島における船の概要については、李奎遠(イ・ギウウォン)『壬午(1882年)

22 「漁船改良丸の好果」『山陰新聞』明治27(1894)年1月14日付。明治30(1897)年にも真野哲太郎は、西当佐太郎とともに鬱陵島へカナキ漁をするために行っている。

23 松原新之助編『第三回内國勸業博覽會第四部審査概評』(大日本水産會報告號外)大日本水産會、明治23年9月24日。

24 前掲、『第二回水産博覽會報告』22頁。

25 島根縣隱岐島廳『明治三十七年島根縣隱岐國統計書』河田商店、明治39年3月13日、65頁。『都万村誌』所収の明治41年の記録を見ると、母船142石1艘、漁船(長さ7・8尺 5挺立)6艘と乗組員28名で出漁とあり、母船を中心とした船団で出漁していたことが分かる。

26 島根縣『大正三年島根縣統計書 第一卷 土地人口其他之部』島根縣、大正6年2月20日、78頁。

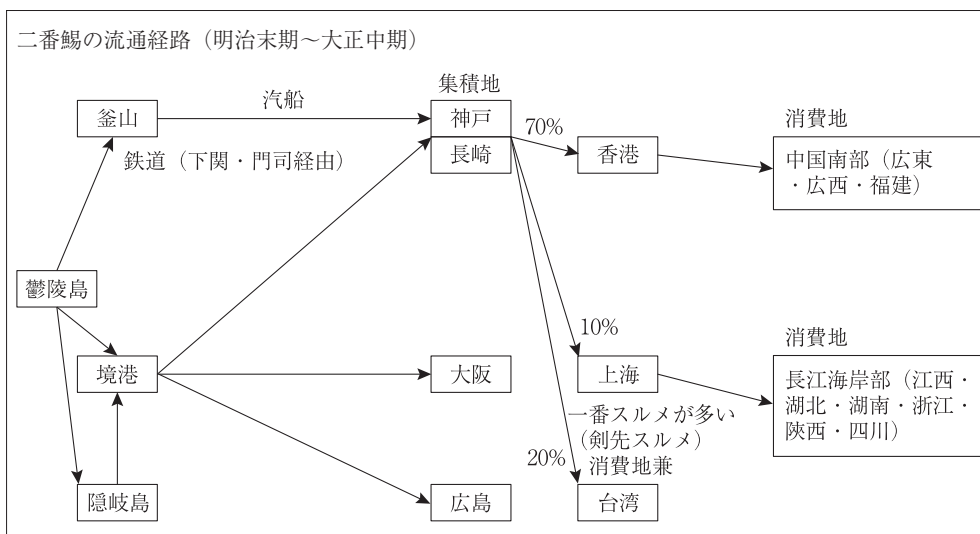
四月日鬱陵島檢察日記』によれば、当時は全羅道興陽の草島、三島（巨文島）から鬱陵島へ渡島し、鬱陵島の木材を伐り出し、運搬船を造り、ワカメを採っている状況が記されている。しかし、ここではイカ漁を行っておらず、漁船も造ってはいなかった<sup>27</sup>。

#### 4. 流通

ここまで、鬱陵島を舞台としたイカ漁及びその漁獲を基にした鰯加工技術の創始とそれを支えた隠岐島の鰯への加工法の充実、さらに伝播の過程を担保する人の移動とその移動を実質化する漁船について言及してきた。次には、こうして鬱陵島において生産された鰯の流通とその実績に関して述べる。

島根県刊行の『明治四十二年 島根縣統計書 第一卷』<sup>28</sup>には、明治42（1909）年の輸入貨物として鰯が記載されている。それによれば、数量1,900貫、価格2,470円、輸入元が北海道、朝鮮とある。同年の鰯の輸出貨物を見ると、数量310,099貫、価格380,244円で、仕向地は鳥取、大阪、神戸、広島、山口となっている。鰯は島根県において相当量が生産されているのにもかかわらず、表4～7に見られるごとく輸入されている。その輸入先の一つと

表3 島根・鳥取県及び鬱陵島の鰯の生産と流通



出所：長崎商業会議所調査部（本山豊治編）『長崎に於ける海産貿易 第一冊』長崎商業会議所、大正7年2月28日、49、55-56、60頁の記述を基に作表。

27 イヘウン・イヒョングン『晩隠 李奎遠の鬱陵島檢察日記』韓国海洋水産開発院、2006年、225-229頁（「啓草本」の原本図版）。なお、原本は韓国国立済州博物館が所蔵している。

28 島根縣編『明治四十二年 島根縣統計書 第一卷土地人口其他之部』島根縣、明治44年2月28日、212、218頁。

して「朝鮮」とあるのは、おそらく隠岐島方式で生産された鬱陵島の鯛で、ブランド化した隠岐島尾吼鯛に含まれて、明治42年には流通していたと思われる。島根・鳥取県及び鬱陵島の鯛の流通経路を整理したものが表3である。

表8に見られる神戸税関境支署の取扱については、小泉憲貞『境港沿革史』に、「境港は外国貿易港となって以来専ら朝鮮貿易港として輸出入貨物を取り扱う所十中八九は鬱陵島に対して多く云々」との記述がある<sup>29</sup>。また、表6に掲げた『通商彙纂 第貳號』記載の明治42（1909）年～大正2（1913）年度までの鬱陵島の鯛輸出货量と同年度の『神戸外国貿易概況』記載の境港への輸入量（表7）とを比較検討したところ、鬱陵島の鯛の大部分が境港に輸出されていたことが実証できる。

鬱陵島の鯛の流通に関しては、吉田敬市『朝鮮水産開発史』<sup>30</sup>に、「本島（鬱陵島：引用者注）産のスルメは専ら隠岐島人の開拓で、（明治：引用者注）四十二、三年頃から石見・境・米子等の商人が、専門の運輸船（漁船とは仕込関係）をもって取引し、殆んどスルメと米との物物交換であった」との記述がある。鬱陵島において朝鮮人がスルメイカ漁を始めた1906～1907年より、急激にスルメの輸出货量が増加した。スルメイカの豊漁に伴って、他の漁種より漁業に携わる人々も増加し、日本人居住者・寄留者だけでなく、朝鮮人も漁業に従事するようになり、さらに漁法・漁具の技術革新により生産性が向上した。

その後、『慶尚北道職員名簿』（大正6年12月現在）に、鬱陵島の水産巡回教師として橋本義助の派遣があり、朝鮮總督府『大正十四年 朝鮮要覽』大正14年1月4日によると、朝鮮半島においては、大正7（1918）年7月1日に「水産製品検査規則」が実施され、朝鮮において検査に合格した水産製品は内地において再検査をしなくてもよくなった。それ以前は、一旦内地に移出し、さらに内地人の手によって輸出しなければならなかった。鬱陵島には常設検査所（14か所）こそ存在しなかったものの、臨時検査所（2か所）の一つが置かれた<sup>31</sup>。このことにより、『境興町五拾年史』中の広告に、「竹島干鯛 大豆問屋 専門商標㊦印 刻鯛極白髪製造所 鳥取縣境港 濱田源二郎商店」とあるように<sup>32</sup>、鬱陵島の鯛は「竹島干鯛」として流通する様になった。

29 小泉憲貞編『境港沿革史』、今井活版所、大正4年2月25日、27頁。

30 吉田敬市『朝鮮水産開発史』朝水會、昭和29年5月30日、470頁。なお、「専門の運輸船」の一つである隠岐汽船は、明治43（1910）年より境港－隠岐－鬱陵島間の航路を開設し、さらにスルメイカ漁期になると、多数の漁船を鬱陵島に向けて曳航した。また、「物物交換」であったとするが、鬱陵島では、大正6（1917）年4月に初めての市場が設置されているから、この頃には本格的に貨幣経済へと移行したものと思われる。

31 朝鮮總督府編纂『大正十四年 朝鮮要覽』朝鮮印刷株式会社、大正14年1月4日、303頁。

32 境港市編『新修境港市史 写真資料編』境港市、平成8年12月20日、57頁（広告欄）。

表4 隠岐島のイカ漁獲高及び鰯生産高

年度	漁獲高（物）	価格（圓）	生産高	代價（圓）
明治27（1894）年	486,144斤		477,793斤 （輸出量）	43,050
明治32（1899）年			116,232貫 （輸出量）	96,272
明治33（1900）年			158,208貫 （輸出量）	79,104
明治34（1901）年			129,889貫 （輸出量）	86,592
明治35（1902）年	柔魚 1,568,000貫	338,688		
明治36（1903）年	柔魚 1,066,736貫	266,684		
明治37（1904）年	烏賊 55貫 一番柔魚 1,352貫 二番柔魚 254,020貫	25 365 45,762	110,872貫	152,460
明治38（1905）年	一番柔魚 1,150貫 二番柔魚 332,197貫	240 79,948	260貫 76,056貫	260 87,551
明治40（1907）年	一番柔魚 750貫 二番柔魚 1,193,416貫	225 284,229	130貫 274,906貫	195 395,874
明治42（1909）年	烏賊 4貫 一番柔魚 850貫 二番柔魚 420,021貫	4 463 106,631	甲付 20貫 82貫 114,225貫	20 122 128,708
明治43（1910）年	烏賊 4貫 一番柔魚 280貫 二番柔魚 852,050貫	4 168 246,564	甲付鰯 2貫 一番鰯 110貫 224,667貫	2 131 273,474
明治44（1911）年	烏賊 2貫 一番柔魚 128貫 二番柔魚 434,316貫	2 128 113,162	98貫 125,090貫	117 112,299
大正4（1915）年	烏賊 14貫 一番柔魚 210貫 二番柔魚 360,600貫	4 37 59,962	35貫 65,342貫	35 64,176

出所：明治27年の数字は、『島根縣周吉穩地海士知夫郡統計書』明治28年12月20日。以下同様に、『島根縣周吉穩地海士知夫郡統計書』明治33年9月5日、『島根縣周吉穩地海士知夫郡統計書』明治34年8月10日、『島根縣周吉穩地海士知夫郡統計書』明治36年2月25日、『明治三十五年島根縣隱岐國統計書』明治37年10月8日、『明治三十六年島根縣隱岐國統計書』明治38年7月25日、『明治三十七年島根縣隱岐國統計書』明治39年3月13日、『明治三十八年島根縣隱岐國統計書』明治40年5月16日、『明治四十年島根縣隱岐國統計書』明治42年5月12日、『明治四十二年島根縣隱岐國統計書』明治44年9月15日、『明治四十三年島根縣隱岐國統計書』大正元年8月20日、『明治四十四年島根縣隱岐國統計書』大正2年5月30日、『大正四年島根縣隱岐國統計書』大正6年6月30日。

表5 島根縣統計書による鯛の輸出

年	数量（貫）	価格（円）	仕向地
明治 37（1904）年	142,582	194,630	大阪、神戸、下ノ関、長崎、境港
明治 38（1905）年	108,741	160,601	大阪、鳥取縣、兵庫縣、下関、山口縣、長崎縣、廣島縣
明治 39（1906）年	138,259	193,563	大阪、神戸、長崎縣、韓國、山口縣
明治 40（1907）年	320,291	384,349	山口縣、長崎縣、韓國、神戸、大阪
明治 42（1909）年	310,099	380,244	鳥取、大阪、神戸、廣島、山口
明治 44（1911）年	190,111	256,050	神戸、山口、大阪、鳥取

出所：島根縣編『島根縣統計書』各年版の数値を基に作表。

表6 島根縣統計書による鯛の輸入

年	数量（貫）	価格（円）	輸入先
明治 42（1909）年	1,900	2,470	北海道、朝鮮

出所：島根縣編『明治四十二年 島根縣統計書土地人口其他之部』島根縣、明治 44 年 2 月 28 日、218 頁。

表7 鬱陵島の輸出品：鯛

年	数量（貫）	価格（圓）
明治 37 年（1904）年	1,707	1,707
（同上）	（1,173）	（1,173）
明治 38（1905）年 1 月～10 月	1,479	1,529
〔同上〕	〔1,999〕	〔2,000〕
（同上）	（1,499.8）	（1,500）
〔明治 39（1906）年〕	〔9,928〕	〔11,416〕
（同上）	（9,927）	（11,416）
〔明治 40（1907）年〕	〔33,186〕	〔39,823〕
（同上）	（33,186.4）	（39,824）
〔明治 41（1908）年〕	〔20,714〕	〔26,447〕
（同上）	（20,035.5）	（26,046）
〔明治 42（1909）年〕	〔35,295〕	〔35,017〕
〔明治 43（1910）年〕	〔70,464〕	〔91,682〕
〔明治 44（1911）年〕	〔87,338〕	〔109,562〕
〔明治 45（1912）年〕	〔130,000〕	〔130,000〕
〔大正 2（1913）年〕	〔136,000〕	〔136,052〕

出所：「<sup>マ</sup>韓國鬱陵島事情」外務省通商局編纂『通商彙纂』明治 39 年第 2 号、博文館、明治 39 年 1 月 13 日、30 頁。

注：（ ）内の数字は、農商工部水産局『韓國水産誌 第二輯』龍山印刷局、隆熙 4 年 5 月 5 日、716 頁（島根縣人片岡某の調査）。〔 〕内の数字は、「慶尚北道鬱島水産状況（慶尚北道報告）」『朝鮮彙報』朝鮮總督府、大正 4 年 3 月 1 日、82 頁。

表8 境港における漁船の捕獲採集をなしたる各種水産物の特別輸入数量価額：鰯

年	数量（斤）（貫換算）	価額（円）
明治42（1909）年	186,399（29,824）	27,266
明治43（1910）年	436,308（69,809）	65,662
明治44（1911）年	545,162（87,226）	117,815
明治45／大正元（1912）年	781,301（125,008）	135,501
大正2（1913）年	784,712（125,554）	111,193
大正3（1914）年	387,369（61,979）	61,038
大正4（1915）年	496,543（79,447）	72,182
大正5（1916）年	446,167（71,387）	74,046
大正6（1917）年	334,853（53,576）	69,539
大正7（1918）年	186,158（29,785）	64,200
大正8（1919）年	112（18）	67

出所：神戸税関『神戸港外国貿易概況』神戸税関、明治38年～大正8年の各年版の数値を基に作表。  
注：貫換算は、1貫＝6.25斤での計算。なお、1斤＝600g。

## 5. 鬱陵島における明治39（1906）年から大正7（1918）年頃にかけてのイカ漁の様子

それでは、他方鬱陵島にイカ漁法が日本人により持ち込まれ、それに倣い朝鮮人が参入して以降のイカ漁の様子は、『通商彙纂 明治四十年 第五十一號』に韓國統監府調査として「鬱陵島ニ於ケル農工商ノ状況」の記載があり<sup>33</sup>、そのなかで次のような記述を行っている。

「昨年（1906年：引用者注）未曾有ノ烏賊獵アリシニヨリ之レカ目的ニテ既ニ漁船二十餘艘ヲ造リシカ猶本年中二十艘位ハ製造セラルヘシト云ヘリ日本形帆船ハ目下七百石積位ノモノ一艘製造中ナルモ尚本年中（1907年：引用者注）二三艘ハ製造セラルヘシト云フ」「物資価格表 品名 鰯 數量 一貫目 價格 一圓十錢」。

また、前出の「韓國鬱陵島事情」では、「五月以降七月ノ候迄ヲ初期トシ此期ニ獲ラルハモノヲ夏烏賊ト称ス其レヨリ九月迄ニ漁獲スルモノヲ秋烏賊ト云ヒ九月ヲ以テ終リトス此兩期間全島沿海至ル所夥シキ烏賊群ヲ為スコトトテ漁業者タルト否トニ別ナク捕獲シ鰯トシ輸出ス其輸出額モ年々増加ス」と記述している<sup>34</sup>。

鬱陵島では、明治39（1906）年以降、概してスルメイカ漁は活況を呈していたが、その10年ほど後になると、一転して豊漁・不漁の変動が激しくなる。たとえば、中井猛之

33 「鬱陵島ニ於ケル農工商ノ状況」外務省通商局編纂『通商彙纂』明治四〇年第五一號、博文館、明治40年9月8日、20-26頁。

34 前掲、「韓國鬱陵島事情」33頁。

進による2つの著述によれば、「數年來不漁不作の爲島民の窮乏甚しく……本年（大正5年＝1916年）は幸に稀有の豊漁豊作」<sup>35</sup>、「漁業ノ主タルモノハ烏賊漁ナレドモ微弱ナル暖流ニ乗ズル烏賊ニモ限アルニ一方無制限ニ漁獲スル爲メ年々歳々其産額ヲ減ズルノミ、唯島ニハ良港ナク、大船ヲ繋グニ適セザル故僅ニ其廢滅ヲ免レツ、アリ」<sup>36</sup>といった具合である。

もとより、スルメイカ自体は回遊魚であるため、気象や海流、海水温などの自然的変化の影響を受けやすく、漁獲の絶対量において年、季節ごとにより大きな違いが生じるのは不思議なことではない。しかし、鬱陵島においては、このことに加え、人為的な漁業従事者の急増などの要因が考えられ、こうした豊漁・不漁によって、個々の漁業従事者の収入が大きく左右されることが多かった。

## 6. 漁具・漁法

鬱陵島の漁具・漁法については、池田哲夫の三つの論考<sup>37</sup>、および<sup>キムスヒ</sup>金秀姫の報告<sup>38</sup>、また韓国文化財管理局文化財研究所芸能民俗研究室による冊子<sup>39</sup>などにまとまった記述がある。これら業績を本稿の趣旨にそくしてまとめるなら、鬱陵島へと伝播したイカ漁法に付随して、漁具（二股・タラシ・ゴンガラ・トンボ・三尺手竿など）も隠岐島仕様のものが伝播し、鬱陵島の郷土資料館にも展示されている。

## 7. 鬱陵島漁業組合

鬱陵郡公報室刊行の『鬱陵島郷土誌』によると、大正3（1914）年に「鬱陵島漁業組合」の設立認可が下され、初代組合長に片岡吉兵衛が就任している。昭和12（1937）年からは、

35 中井猛之助「鬱陵島廳報告抄－鬱陵島通信」『朝鮮彙報 大正六年四月號』朝鮮總督府、大正6年4月1日、167頁。

36 中井猛之助『鬱陵島植物調査書』朝鮮總督府、大正8年4月、84頁。

37 池田哲夫『近代の漁撈技術と民俗』吉川弘文館、2004年。池田哲夫「佐渡のイカ漁－その周辺のことなど」『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第17集 漁業の活動とその習俗Ⅰ』平凡社1993年7月5日。「鬱陵島の漁業」『神奈川大学常民研究所調査報告 第19集 暮らしのなかの技術と芸能－中国江西省と韓国鬱陵島』平凡社、2002年。

38 金秀姫「鬱陵島・独島の漁場慣行と日本式漁業の伝播過程」第18回島根県立大学北東アジア地域研究センター日韓・日朝交流史研究会（第1回竹島／独島研究会）レジュメ、2009年7月3日（未刊行）。

39 韓国文化財管理局文化財研究所芸能民俗研究室『韓国民俗総合調査報告書 第二十三冊』（魚業用具編）、韓国文化財管理局文化財研究所、1992年。

韓国人も組合の理事に就任している<sup>40</sup>。

また、島根県総務部が昭和28（1953）年11月11日に同県益田市で行った聞き取り調査、すなわち「竹島に関する調査」によれば、「漁業はイカ、サバ、潜水で日本人が親方で日本人・朝鮮人を半々くらい使っていた。朝鮮人は技術を知らないので下働きをやっていた。朝鮮人が親方で朝鮮人を使って漁をやり出したのは昭和10年ころからで、それに2・3人だけだった」という<sup>41</sup>。

## 8. 人口の変化

次に掲げる表9のごとく、日本政府により大韓帝国に統監府が置かれた明治39（1906）年には、隠岐島・鬱陵島ともに人口に関して大きな変化が現れている。隠岐島においては、本籍人が現住人を上回るといった出稼人が急増し、また鬱陵島においては、日本人・韓国人を問わず急増している。とりわけ、大正3（1914）年には、鬱陵島の日本人人口がピークとなり、2,094人に達している。大正3年に近い年の日本人と韓国人の鬱陵島における人口比率15:85で推定すると、同年の韓国人は11,866人となり、総人口が13,960人となる。

また、鬱陵島の人口増減に関しては、次のような興味深い資料がある。新聞記事に掲載された、記者の質問に対する当時の鬱陵島島司の回答である<sup>42</sup>。

記者の質問：「どうしてこの絶海の孤島に過剰な人口があるのですか」

島司の回答：「毎年数十家族が満州移民するのですがね、面積の割合に産物が豊富なので自然人が集まり却つて今度は人口の割りに産物が少い結果になるのですね」

記者の質問：「大体どういふ動機で入島しますか」

島司の回答：「さうですね、大体内地人は四百四十人、朝鮮人一万一千二百人ですが、入島の原因は朝鮮人の方で韓国時代老論とか小論とか小党派が濫立して抗争してゐた時分に政治上の不满から、また内乱の不安から逃避して来たのが多いですね。昔からこの島は東海の武陵桃源と呼ばれ宝の島のような感じを持たれてゐたのですね」

記者の質問：「政治上の不满といふと日韓併合なんかの不满もあるのですか」

島司の回答：「いいえ、それよりも以前の事です。殊にこの島では内地人商人と密貿易などをやってみたので、また島国独特の団結心から内鮮融和は本道よりもずっと早くから徹底して内鮮人の対立などは聊かもありませんね」

記者の質問：「入島の動機は外にどんなものがありますか」

---

40 鬱陵郡『鬱陵島郷土誌』鬱陵郡公報室、1963年8月30日。

41 広報文書課『昭和二十八年度竹島関係綴』（島根県総務部総務課所蔵文書、未刊行）。

42 羽間特派員記「鬱陵島H」『大阪毎日新聞 朝鮮版』昭和12年1月12日付。



表9 隠岐島及び鬱陵島における人口の変遷表（1901年から1915年まで）

<隠岐島の人口>

年	隠岐島の人口	
	現住人数	本籍人数
明治34（1901）年	37,663	36,532
明治35（1902）年	38,100	37,096
明治36（1903）年	37,688	36,923
明治37（1904）年	37,166	37,311
明治38（1905）年	37,701	37,509
明治39（1906）年	37,833	38,328
明治40（1907）年	38,546	37,272
明治41（1908）年	38,749	38,344
明治42（1909）年	39,278	38,878
明治43（1910）年	39,502	39,444
明治44（1911）年	39,595	39,768
明治45／大正元（1912）年	39,647	40,196
大正2（1913）年	—	—
大正3（1914）年	41,026	41,097
大正4（1915）年	41,099	41,506

<鬱陵島の人口>

調査年月日	日本人戸数	日本人人口	韓国人戸数	韓国人人口	合計戸数	合計人口	資料名
1901頃	—	—	447	—	—	—	①
1902頃	79	在留邦人548	556	3,340	635	3,888	①
1903	—	—	—	—	—	—	—
1904.12末	85	在留邦人260	—	—	—	—	①
	81	在留邦人248	614	約4,500	695	約4,748	②
1905.4	89	251	—	—	—	—	③
1905.5	98	341	—	—	—	—	③
1905.6末	110	336	—	—	—	—	④
1905末頃	95	302	564	3,300余	659	3,602余	⑤
1906.6.30	118	493	737	5,859	855	6,352	⑥
1906.10末	139	463	—	—	—	—	⑦
1906.12.31	153	541	741	5,923	894	6,464	⑥
1906	153	541	741	5,923	894	6,464	⑧
1907.6.30	168	584	747	5,948	915	6,532	⑥
1907.12.31	176	616	791	6,228	967	6,844	⑥
1907.12末	173	561	—	—	—	—	⑨
1907	175	616	790	6,227	965	6,843	⑧
1908.6.30	186	665	781	6,229	967	6,894	⑥
1908.12.31	200	715	751	6,108	951	6,823	⑥
1908.12末	193	615	—	—	—	—	⑨

1908	200	710	750	6,101	950	6,811	⑧
1909.6.30	219	762	798	5,904	1,017	6,666	⑥
1909.12.31	223	736	907	5,162	1,130	5,898	⑥
1909 末	224	768	902	4,995	1,126	5,763	④
1909	223	736	907	5,162	1,130	5,893	⑧
1910.6.30	260	864	—	—	—	—	⑥
1910.12.31	270	931	—	—	—	—	⑥
1911.6.30	343	1,197	—	—	—	—	⑥
1911.12.31	342	1,249	—	—	—	—	⑥
1911	332	1,192	1,082	6,880	1,414	8,073	⑧
1912.6.30	586	1,776	—	—	—	—	⑥
1912	388	1,261	1,104	6,961	1,492	8,222	⑧
1913.9.30	430	1,490	—	—	—	—	⑥
1914.9.30	607	2,094	—	—	—	—	⑥
1914	428	1,404	1,471	8,597	1,899	10,361	⑧
1915.9.30	513	1,548	—	—	—	—	⑥
1915	371	1,231	1,403	8,392	1,774	9,623	⑧

出所：隠岐島の人口に関しては、島根縣『島根縣統計書』（各年版）を、鬱陵島の人口に関しては、福原裕二「20世紀前半の鬱陵島各種統計（第1版）」『北東アジア研究』第21号、2011年3月、89-92頁を参照にして作表。〔—〕は記載なし。

注：表中のゴシック体で表した数字（1909年、1911年、1914年合計人口）は、原資料の日本人・韓国人人口の合計数が合計人口と一致しないことを示している。また、表中の「資料名」欄は、各年の戸口数字の原資料を示したものである。それら資料名は以下の通り。①「韓国鬱陵島事情」外務省通商局編纂『通商彙纂』第234号、元眞社、明治35年10月16日、44頁。②「鬱陵島状況取調復命書」（明治38年1月末現在）金容九編『韓日外交未刊極秘資料叢書42』亜細亜文化社、1972年2月22日、229-237頁。③「鬱陵島現況」外務省通商局編纂『通商彙纂』明治38年第50号、博文館、明治38年9月3日、49頁。④農商工部水産局編纂『朝鮮水産誌 第二輯』龍山印刷局、隆熙4年5月5日、710-711頁。⑤「韓国鬱陵島事情」外務省通商局編纂『通商彙纂』明治39年第2号、博文館、明治39年1月13日、34頁。⑥鬱陵郵便所『明治三十七年起沿革簿』（1956.7現在）。⑦「在韓本邦人戸口及諸官署一覧表」統監府總務部内事課、明治40年2月26日。⑧鬱陵郡誌編纂委員會『鬱陵郡誌』鬱陵郡、2007年2月28日、81-83頁（ただし、この資料は、1906年～1945年において1909、1911、1914、1919～1924、1935年の数値が合わない。また、1910、1913、1916～1918、1939～1941年が欠けている。さらに、『朝鮮總督府統計』との違いもみられる）。⑨「明治四十一年十二月現在在韓本邦人戸口表」『統監府政況報告並雜報』外務省記録。

島司の回答：「それから自己の経済上の原因即ち生活難から、それに極く少数ですが犯罪者の逃避したものや流罪人があります。これは朝鮮人の方ですが。内地人の方では利権開発その他営利の目的、それに派遣された官公吏や招聘された医師、僧侶の類ですね。とにかく気候もよいし世間離れがしてゐるので住むのに呑気でよいのですね。だから少々移民してもすぐ後から後からと移民して来て年々歳々人口過剰なんですよ」

このように島司は、朝鮮人は政治的には日韓併合に不満がないと言い、経済的には日本人の入島が利権・営利目的であることを指摘している。

## 9. 鬱陵島の運輸交通

最後に、本稿で言及した時期の鬱陵島の運輸交通の状況についてまとめておく。ここでは、鬱陵郵便所『明治三十七年起 沿革簿』（1956.7 現在）を基本資料とし、可能な限りで収集した他の資料を加味し作成した年表を示す。本表の分析については、今後の課題とする。

表 10 鬱陵島の運輸交通関係年表（1876～1945年）

記載年月日	事項
明治9（1876）年	釜山開港
明治16年（1883）年10月	「蔚陵島一件」（犯禁渡航）により共同運輸の越後丸で日本人全員240～250人余を10月6日出航して10月15日赤間関に引揚させる
明治17（1884）年	「萬里丸船長渡邊末吉ヨリ蔚陵島木材運賃請求一件」
明治17（1884）年10月20日	江原道鬱陵島の居民1人鬱陵島に来ていた日本船に同乗し10月18日釜山に向かったが長崎県府中浦に漂着
明治27（1894）年	「こまい帆船隠岐島で風待ち15日～1ヶ月あちこちと漂流してやっと着く」（片岡吉兵衛談）羽問乙彦「鬱陵島」『大阪毎日新聞 朝鮮版』1937年1月17日付
明治27（1894）年2月25日	鬱陵島より石見國安濃郡波根東村に漂着
明治28（1895）年10月	隠岐汽船株式会社設立
明治29（1896）年3月	濱田・境など開港外貿易港（日本国民所有の船舶に限る）に指定
明治31（1898）年3月1日	江原道平海鬱陵島の人32名＋内人7名＋小兒7名が乗ったジャンク船が釜山から鬱陵島に行く途中漂流しロシア汽船ピータルスボルグ号に救助される『困難船及漂民救助雑件』
光武2（1898）年	韓國人小型汽船1艘買入
明治31（1898）年7月21日	濱田・境など開港となる
明治31（1898）年8月20日	「濱田長濱竹島下り入津 境 凱旋丸」神田和作『客船帳』中村家所蔵
光武3（1899）年	韓國人帆船開運丸を購入後定期船運航を始めるが、日本へ向けて出て暴風に遭い沈没『鬱陵島交通船問題』光武4年決着

光武4(1900)年頃	朝鮮から鬱陵島へ嫁入り。帆・櫓3～5人乗の船で7日。呉賢禰「韓国鬱陵島におけるミヨヌリ(嫁)の暮らし」『新潟大学民俗学研究室10周年記念論文集』2004年9月、250頁
光武4(1900)年10月25日	鬱陵島を鬱島と改称、島監から郡守、江原道、郡庁台霞洞『勅令41号』(大韓帝國官報第1716号)
明治35(1902)年2月26日	境港三光社汽船第二三光丸(160t)、1昼夜で鬱陵島へ、臨時依頼、9月～2月交通皆無となる為、3回越年者増加の為食料を運ぶ(越年者明治33年:99名・明治34年:350名)
明治35(1902)年5月31日	都野津の小松原某所有大栄丸(木材・瓦積)が竹島帰り中彦島沖で沈没『防長新聞第5170号』
明治35(1902)年5月	鬱陵島へ朝鮮から行く船なし、和船を雇う 釜山1(1)艘 小宮萬次郎船大平丸・長髯牟浦2(1)隻・隠岐5隻・赤間関1(2)隻・境2隻(汽船1)・博多1隻・蔚山・三島若芽採取20隻
明治35(1902)年	毎度3月～8月迄 鬱陵島と馬関・境・濱田・隠岐西郷間に和船の往復する事もある 2昼夜半 2航海に1回は漂着『通商彙纂第234号』明治35年10月16日 敦賀・三國・但馬・丹後・佐渡・能登等に漂着『實業世界第4巻第17号』
光武7(1903)年	郡庁を臺霞より道洞に
明治37(1904)年6月1日	釜山・浦項方面へ1～3ヶ月に1回、境へ1～3ヶ月に1～2回、帆船便(150～300石積)4～5隻で従事しているが不便である。
明治37(1904)年9月25日	軍艦新高 本邦漁民リアンコ島・韓人之を独島『軍艦新高日誌』
明治37(1904)年11月25日	仁摩郡温泉津浦に漂着(11月19日鬱陵島出帆)
明治38(1905)年1月1日	同上。時々博多・下関へ1カ年に帆船2～3回航海
明治38(1905)年	朝鮮本土との交通皆無、在島韓民協同し本邦和船を雇入れ、年二三回ずつ蔚山又は釜山へ大豆を輸出し、日用品を買収『實業世界第4巻第17号』明治38年9月1日
明治38(1905)年1月中	入港:境港より1、釜山より1。出港:境港へ4、釜山へ1。
明治38(1905)年6月	竹島漁獵合資会社設立
明治38(1905)年8月19日	海軍御用船京都丸で松永武吉等竹島視察
明治39(1906)年1月1日	鬱陵島の有志が帆船を新造し航海に従事した
明治39(1906)年2月1日	統監府開庁
隆熙元(1907)年	地方行政改革で鬱陵島が江原道から慶尚南道に
明治40(1907)年1月1日	新造帆船の数が増加して便利に成ったが、定期船では無い
明治40(1907)年	隠岐汽船会社所有の汽船を以て鬱陵島貿易に従事『神戸港外國貿易概況』
明治41(1908)年1月1日	帆船の数増加し鬱陵島から内地及び本土へ航海するもの10余隻となったが皆風向きに左右され、冬期西風が多く吹く時は航海が出来なくなる。明治39年(1906年)10月上旬以来各地へ向け出帆したが、途中で11隻風待ちして帰港出来ておらず食糧が欠乏し困難を極めると共に書面の通信、新聞も到着せず暗黒世界である。
明治41(1908)年	藤野金太郎船(船長西当佐太郎)境港から乗客(12～13人)・郵便・貨物 鬱陵島からイカ・のり・和布・大豆・材木『鬱陵島友会報第四号』
明治41(1908)年	釜山汽船会社設立

明治 41 (1908) 年	鬱陵島貿易増進『神戸港外國貿易概況』
明治 42 (1909) 年 1 月 1 日	明治 41 年中は風向きが順調で、各方面に月 1～2 回航海できたので何ら不便を感じなかった。
明治 42 (1909) 年 10 月 29 日	隠岐汽船株式会社船第二隠岐丸外航船として境より入港 濱田・釜山・元山間の航路を開始 『濱田税関支署沿革概要 附重要事項略記』
明治 42 (1909) 年 12 月 31 日	同上
明治 42 (1909) 年	9 月 20 日から第二隠岐丸 朝鮮航路（北韓航路）試航 2 回 乗客 322 人・荷物 4039 個 12 月 18 日 朝鮮航路開始決定『隠岐航路史』
明治 42 (1909) 年	藤野金太郎船（船長大上信市）『鬱陵島友会報第四号』
隆熙 4 (1910) 年 3 月 1 日	鬱陵島（慶尚南道）－釜山 177 哩『韓國地圖』
明治 43 (1910) 年 8 月 28 日	朝鮮總督府設置・日韓併合 関税は 10 ヶ年据え置き
明治 43 (1910) 年 10 月 1 日	鬱陵島（旧松島）鬱島一境 186 鬱島－釜山 177『朝鮮交通全圖』大阪毎日新聞社
明治 43 (1910) 年 12 月 31 日	明治 43 年 5 月より隠岐汽船株式会社隠岐丸が航海を開始し、8 月よりは郵便物も搭載し、大いに便利に成った。
明治 43 (1910) 年	3 月 7 日～4 月 16 日第 1 回韓国航路 吉辰丸（1890 年建造・鋼鉄船・961.01t）32 ヶ所寄港 12 回航海 島根縣・慶尚北道より補助金『隠岐航路史』
明治 43 (1910) 年 3 月～10 月	釜山・浦項－鬱陵島：年 5～6 回。境－鬱陵島：年 30～40 回『鬱島郡誌』『朝鮮總督府月報第 1 卷第 1 号』明治 44 年 6 月 20 日
明治 44 (1911) 年	吉辰丸 不定期 境港－隠岐－鬱陵島－浦項・釜山・元山 イカ漁期は多数の漁船を曳航
明治 44 (1911) 年 3 月 6 日	朝鮮航海補助請求書を朝鮮總督府へ提出『隠』
明治 44 (1911) 年	吉辰丸 北鮮自由航路木浦～郡山沖で海難 第二隠岐丸 境－朝鮮間『隠』
明治 44 (1911) 年 12 月 31 日	明治 44 年も隠岐丸が月 1～2 回航海した。
明治 45 (1912) 年 1 月	朝鮮郵船株式会社迎日丸（補助機関付）迎日湾－鬱陵島間月 3 回定期を開始『毎日申報』1912 年 1 月 7 日付
明治 45 (1912) 年 1 月 19 日	朝鮮郵船株式会社設立 朝鮮總督府の命令航路（1912 年 4 月 1 日～1915 年 3 月 31 日迄）に東鮮航路として迎日湾（浦項）－鬱陵島線が含まれる毎月 2 回以上、1 年期間 24 回以上の往復、50t 以上の補助機関付帆船 1 艘『朝』
明治 45 (1912) 年	朝鮮航路 毎月定期＋臨時便 13 回 乗客 124 人・荷物 19748 個『隠』
大正元 (1912) 年 9 月末日	慶尚南道鬱陵島荷客取扱店『朝鮮郵船株式会社二十五年史』
大正元 (1912) 年 12 月 31 日	大正元年は帆船の破船や航路変更の為航海度数が減少したが、その代わり朝鮮郵船株式会社迎日丸（補助機関付）が 1 ヶ月 3 回以上定期航海した。昔からの念願が叶った。（7 月から）
大正頃	1 週間に 1 回の定期船（200t 程度）沖合に碇を下し舢で上陸 郵便物（公文書・私文書・官報・新聞雑誌）・人・物『鬱陵島友會報第九号』
大正 2 (1913) 年	朝鮮航路 13 回乗客 621 人・荷物 10983 個 第三隠岐丸（188t・沈没・10 人死亡）と第二隠岐丸（235t）衝突『隠』

大正2(1913)年	鬱陵島移住民用精米の近年朝鮮郵船会社に依り釜山同島間の定期航路開始し釜山より直接供給を仰ぐものを増加せし『神戸港外國貿易概況』
大正2(1913)年12月31日	迎日丸が沈没した。代わりの汽船が浦項・竹辺の外甘浦・九竜浦へも寄港する事となり朝鮮内への便利が良くなった。
大正3(1914)年	朝鮮航路4回 乗客531人・荷物7335個『隠』
大正3(1914)年3月1日	慶尚南道から慶尚北道に(府郡廃合により)
大正3(1914)年	鬱陵島 鬱島(慶北)一境(伯耆)172 鬱島-釜山173 鬱島-浦項・迎日119『朝鮮案内』朝鮮總督府
大正3(1914)年12月31日	大正3年より朝鮮郵船株式会社の汽船の航海度数が月4回になるとともに、寧海・盈徳へも寄港することと成り益々便利に成った。
大正4(1915)年12月31日	同上
大正4(1915)年3月1日	朝鮮郵船汽船 江陵丸(200t)釜山-鬱陵島1箇月定期4往復、浦項・盈徳郡江口・寧海大津・竹邊 内地とは境港-鬱陵島 不定期 汽船隠岐丸柔魚盛漁中は1箇月2往復も『朝鮮集報』
大正4(1915)年4月1日	から大正4年12月迄釜山鬱陵島線第2回命令航路『朝』
大正4(1915)年5月1日	島制実施 鬱島郡を鬱陵島に
大正4(1915)年	迎日湾-鬱陵島線から釜山-鬱陵島線となる 月3回年、36回、釜山・浦項・盈徳・寧海・竹邊・鬱陵島『朝』
大正4(1915)年6月19日	から大正9年3月迄第3回総督府命令航路釜山鬱陵島線『朝』 釜山-鬱陵島線月4回朝鮮郵船株式会社の盈徳丸(240t)が就航する『釜山港経済一班』大正5年
大正4(1915)年	鬱陵島線(朝鮮航路)6回 乗客384人・荷物4966個『隠』
大正5(1916)年	朝鮮總督府命令線 釜山鬱陵島間 朝鮮郵船 盈徳丸(240t)木造船 月4回『釜山港経済一班』
大正5(1916)年	竹島線 5回 乗客217人・荷物6800個 鬱陵島線代理店 道洞 由浪乙次郎『隠』
大正5(1916)年12月31日	大正5年より朝鮮郵船株式会社の汽船の寄港地平海が追加される〔月4回 平海・丑山浦・九龍浦・方魚津・長生浦(蔚山)を臨時寄港地に加える〕
大正6(1917)年	岡田汽船創設(大正8年3月より境-元山間定期船山陰丸を運航)
大正6(1917)年	竹島線 第二隠岐丸 1回 乗客138人・荷物587個 代理店同じ『隠』
大正6(1917)年12月31日	大正6年は朝鮮郵船株式会社の汽船の1ヶ月5回の定期航海をする事となった。
大正7(1918)年	代理店同じ『隠』
大正7(1918)年4月1日	朝鮮汽船が釜山鬱陵島間の命令航路を受け三菱造船所で建造費20余万円をかけた太東丸(267t・ディーゼル・14ノット)を新造に『大阪毎日新聞 朝鮮版』(1934年2月11日付)
大正7(1918)年12月	帆船 進洋丸(23.82t・板歩3寸5分五葉松・ミヨシ3尺巾タブ造り)船主 大上信市 船長 島根久次郎 乗客10数名 難破 隠岐島前倉ノ谷に着く(また別に3月8日 竹島廻りで隠岐に乗客15人乗漂着)『鬱陵島友會報第四号』

大正7（1918）年12月31日	大正7年7月より境港との交通が不便になったので鬱陵島の境港出身者有志が相談して発動機船を新造して、朝鮮郵船株式会社の汽船や、帆船の航海の隙間に航海をする。？月より朝鮮郵船株式会社の汽船は1週間に1回と変更される。
大正8（1919）年	8月29日以降、内地・朝鮮間の移出入自由化につき関税撤廃される
大正8（1919）年	新隠岐丸 朝鮮郵船株式会社と傭船契約 国庫及び島根縣補助『隠』
大正9（1920）年1月	朝鮮郵船の傭船隠岐汽船の新隠岐丸、境－温泉津－濱田－鬱陵島－浦項：定期
大正9（1920）年4月1日	朝鮮近海沿岸及び河川の命令航路の更新、釜山鬱陵島線も『朝官報』1920年5月12日
大正9（1920）年4月24日	新隠岐丸 朝鮮郵船株式会社と傭船継続に付追加契約『隠』
大正9（1920）年10月5日	境港との連絡発動機船は海運不況その他の関係上廃止となる。
大正10（1921）年	神戸の岡田汽船の裏日本廻りの汽船、海洋丸・玄洋丸・石洋丸が年数回不定期に鬱陵島の物資を移送するために来航する事と成った。
大正11（1922）年	朝鮮總督府命令航路 沿岸航路 釜山鬱陵島線（道洞月4回）金海丸（217t）長生浦・方魚浦・甘浦・九龍浦・浦項・盈徳・寧海・平海・竹邊・海雲臺・丑山浦に臨時寄港 朝鮮郵船株式會社『朝鮮』大正11年7月1日
大正11（1922）年	新隠岐丸朝鮮郵船株式会社と傭船継続に付追加契約『隠』
大正12（1923）年	〔発動機船を有した船主の乱立あり『朝』〕
大正13（1924）年4月	朝鮮郵船株式会社の釜山－鬱陵島間使用船は従来型の船腹で狭小なので穩城丸（372t）が就航する事となった。
大正13（1924）年	7月より境－濱田－浦項－鬱陵島を月1回試行『隠』道洞入（出）港貿易船舶隻数 汽船17（16）隻・帆船2（1）隻『釜山港貿易概覽』
大正14（1925）年	道洞入（出）汽船11（10）帆船5（1）『釜』
大正14（1925）年	第二隠岐丸の朝鮮郵船との契約満了し返船 定期航路 島根縣及び慶尚北道より航海補助費『隠』
大正14（1925）年2月	10社の船会社が出資合併して朝鮮汽船株式会社を設立
大正14（1925）年4月1日	から昭和5年3月まで第5回航海補助命令『朝』
昭和元（1926）年	道洞入（出）汽船13（13）帆船0（0）『釜』
昭和2（1927）年	島谷汽船株式会社（本社神戸）浦項－鬱陵島－境－舞鶴－宮津
昭和2（1927）年	道洞入（出）汽船11（9）帆船0（0）『釜』
昭和3（1928）年	境港－鬱陵島 定期船月2回 鬱陵島－江原道竹辺－釜山 定期船月5回
昭和3（1928）年	道洞入（出）汽船11（11）帆船0（0）『釜』
昭和3（1928）年	鬱陵島（道洞）－竹邊『朝鮮旅行案内』朝鮮總督府鐵道局
昭和3（1928）年	出入船舶、道洞（鬱陵島）、汽船出64、入64、其他ノ船舶（漁船ヲ除ク）出3、入3、其港ヲ根據地ト為シタル漁船数1,042『昭和4年道勢一斑』慶尚北道編纂、昭和4年9月5日
昭和4（1929）年	道洞入（出）汽船13（12）帆船3（3）『釜』
昭和5（1930）年4月1日	より第6回命令航路釜山鬱陵島線『朝』

昭和5(1930)年	定期船穩城丸(1914年製)夜半竹邊出航し8時間半後鬱陵島着 朝鮮郵船の命令航路釜山-鬱陵島線定期1週1往復他に境-元山 航路の汽船が1ヶ月1往復『日本地理風俗大系第17巻朝鮮地方下』
昭和5(1930)年	命令航路 境・慶尚北道より補助(各600圓)岡田汽船 伯洋丸 境-鬱陵島24時間 月1回 船客賃7円(食事付)『大邱日報』『境 港の交通案内』
昭和5(1930)年	道洞入(出)汽船15(15)帆船0(0)『釜』
昭和5(1930)年	釜山-九龍-2時間-浦項-竹辺(23時出)一道洞翌朝着『鬱陵 島友會報第六号』
昭和6(1931)年4月1日	釜山-元山線の廃航により鬱陵島が寄港地となった。
昭和6(1931)年	朝鮮汽船株式会社釜山-鬱陵島線廃航となるがそれにかわり竹辺- 鬱陵島間を月4回航海する『朝』
昭和6(1931)年	道洞入(出)汽船14(16)帆船0(0)
昭和7(1932)年4月	鬱陵島-竹邊(道洞)『朝鮮旅行案内』朝鮮總督府鐵道局
昭和7(1932)年4月	朝鮮郵船株式会社の釜山-元山線廃航により朝鮮汽船株式会社鏡城 丸(372t)が鬱陵島釜山間の定期汽船と成った。 朝鮮汽船株式会社は朝鮮郵船株式会社より釜山-鬱陵島線を譲り受 けた(昭和7年4月より命令航路)『朝』寄港地;釜山・浦項・丑山・ 寧海・平海・蔚珍・竹辺・鬱陵島(道洞) 同年10月15日 朝鮮汽船株式会社鏡城丸から太東丸(大東丸か) にかわる。
昭和7(1932)年5月頃	釜山鬱陵島間 約一昼夜 古い石炭船鏡城丸 (1914年建造 350t位)『鬱陵島友會報第七号』
昭和7(1932)年	道洞入(出)汽船13(11)帆船0(0)『釜』
昭和8(1933)年	釜山-鬱陵島線を月4回太東丸(昭和7年8月20日進水 267t) 運航する。境港まで月2回鏡城丸(372t)臨時運行する『昭和9年 釜山要覽』昭和8年12月末日現在
昭和8(1933)年	道洞入(出)汽船21(22)帆船6(2)『釜』
昭和9(1934)年12月	朝鮮汽船を借り切り人口過剰な鬱陵島島民の内 移住希望者429名 元山に直行予定『京城日報』(1934年11月22日)
昭和9(1934)年	道洞入(出)汽船21(22)帆船0(8)『釜』
昭和10(1935)年頃	するめ満船大東丸は境港へ『鬱陵島友會報八号』
昭和10(1935)年	道洞入(出)汽船22(21)帆船4(5)『釜』
昭和11(1936)年	道洞入(出)汽船20(20)帆船1(5)『釜』
昭和11(1936)年	月4回釜山-鬱陵島-境港、朝鮮汽船株式会社「大東丸」(約300噸) 往復す
昭和12(1937)年	道洞入(出)汽船37(37)帆船58(82)『釜』
昭和13(1938)年	重要産業統制法施行(戦時の為)
昭和13(1938)年	鬱陵島(臺霞洞)-竹邊里『朝鮮全圖』朝鮮總督府檢閱済
昭和13(1938)年8月	太東丸 浦項-竹辺-鬱陵島8月11日5時道洞着 帰り8月19日 午後8時30分道洞出港し8月20日午後1時30分浦項着『貝類学 雑誌第13巻』昭和19年8月
昭和13(1938)年	朝鮮汽船株式会社の定期船は太東丸から金城丸にかわる。

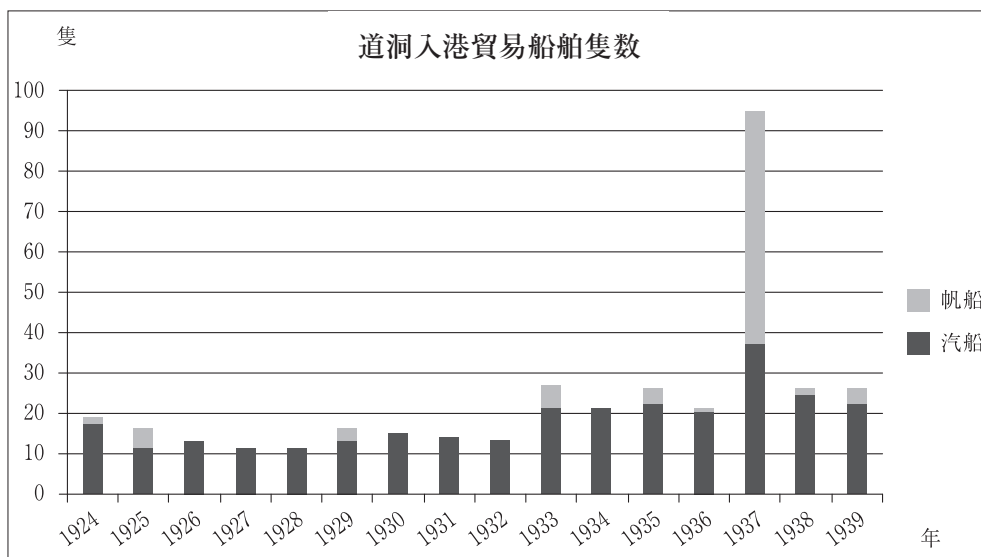


昭和 13 (1938) 年	道洞入 (出) 汽船 24 (25) 帆船 2 (2) 『釜』
昭和 14 (1939) 年	朝鮮汽船株式会社の定期船金城丸にかわり 3 月 13 日に長安丸が就航する。
昭和 14 (1939) 年	朝鮮総督府命令航路 沿岸航路 釜山鬱陵島線 月 4 回 (年 48 回) 以上 長安丸 (330t) 朝鮮汽船株式会社 『朝鮮九月号 第 292 号』
昭和 14 (1939) 年	鬱陵島 (道洞) - 蔚珍 『旅の朝鮮』 朝鮮鐵道局
昭和 15 (1940) 年	沿岸航路釜山鬱陵島線 発動機船 最速力 12 浬以上 250t 月 4 年 48 命令期間昭和 14 年 4 月 1 日～昭和 15 年 3 月 31 日 受命者朝鮮汽船株式會社 『施政三十年史』 朝鮮總督府昭和 15 年 10 月 1 日
昭和 15 (1940) 年 1 月	長安丸から太東丸にかわる。
昭和 15 (1940) 年	9 月 30 日太東丸浦項出港-江口-竹辺-鬱陵島 10 月 1 日朝着 (鬱陵島行きは欠航しがちであったと)
昭和 15 (1940) 年	太東丸 (船長 勝目氏) 船員と共に軍徴備命令 上海方面へ
昭和 16 (1941) 年 8 月 30 日	徴備 特設掃海艇に艤装
昭和 16 (1941) 年	朝鮮汽船株式会社と立石汽船株式会社が合併し西日本汽船株式会社設立
昭和 16 (1941) 年 9 月	定期船太東丸から鏡城丸 (200t 級) にかわる。
昭和 16 (1941) 年 10 月 6 日	定期船鏡城丸から宝城丸 (200t 級) にかわる。
昭和 16 (1941) 年 11 月末	定期船宝城丸から昊和丸にかわる。
昭和 17 (1942) 年 10 月	定期船昊和丸から宝城丸にかわる。
昭和 18 (1943) 年 10 月	定期船宝城丸が 1 日釜山を出港し 3 日竹辺港外で遭難 (火災) したので、18 日代船鏡城丸にかわる。
昭和 19 (1944) 年	定期船月 4 回 釜山-浦項-鬱陵島 配給米等食糧運送が欠航がち 『鬱陵島友會報第四号』
昭和 19 (1944) 年 8 月 16 日夜	太東丸 N36° 15' E125° 50' にて魚雷命中沈没
昭和 20 (1945) 年 11 月	日本人総引揚決定 鬱陵島-浦項-仙崎-博多 『鬱陵島友會報第六号』

出所：鬱陵郵便所『明治三十七年起 沿革簿』(1956.7 現在)による。

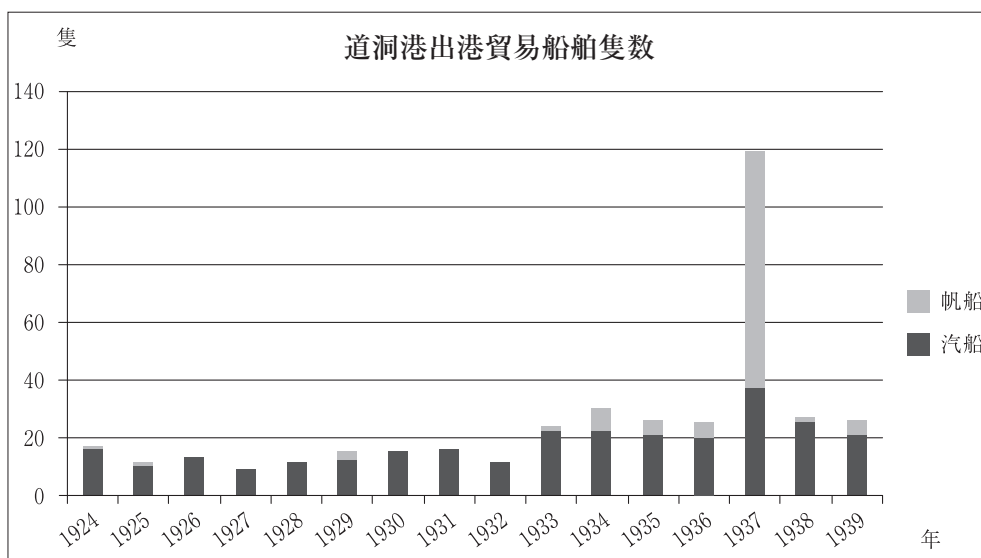
注：表中のゴシック体は出所以外の資料を用いて記載した内容を表している。また、表中の『隠』は『隠岐航路史』、『釜』は『釜山港貿易概覧』、『朝』は『朝鮮郵船株式会社二十五年史』より引用した記述である。

表 11 鬱陵島・道洞港入港貿易船舶隻数



出所：釜山税関『釜山港貿易概覧』各年度

表 12 鬱陵島・道洞港出港貿易船舶隻数



出所：釜山税関『釜山港貿易概覧』各年度

## おわりに

隠岐島では、イカ漁が明治 35 (1902) 年、36 (1903) 年と大豊漁を迎えた後、明治 37 (1904) 年、38 (1905) 年には、逆に急激な大不漁となり、生活困難な人々が多く発生した。このような状況下で、隠岐島においてイカ漁で生計を立てていた漁民らは、近年鬱陵島付近でイカがとれるとの話を聞き<sup>43</sup>、資本投下が比較的少なくて済む鬱陵島へのイカ漁の出稼ぎに危険を顧みず出ることとなり、さらに鬱陵島では、不法に定住する日本人イカ釣り漁業者も出現していった。

一方、鬱陵島では、それまでイカ漁をまったく行わなかったそこで暮らす朝鮮人も、隠岐島からの漁業従事者の流入により、スルメの加工技術や漁法などを自然と身につけ、副業とするものや、なかには漁業を専業にする人々も現れていった。

明治 39 (1906) 年頃から鰻の生産が軌道に乗り、境港などに漁船や運搬用帆船により輸出されるようになった。大正 7 (1918) 年には、鬱陵島に水産製造品臨時検査所が設置された。明治 43 (1910) 年頃よりは、汽船の運航が始まり、鬱陵島を行き来する人や物資の移動が安定して行われる様になり、人口増加にも対応出来るようになった。朝鮮半島本土と鬱陵島を結ぶ航路は、朝鮮総督府命令航路（「朝鮮沿岸に於ける運輸交通の利便を図る為本命令書に依り航海に従事すへし」）に指定された事で、安定した運航が図られる様になったものの、地方制度改正、鉄道網の発展発達、関税制度の変更、軍事的理由などにより、航路、寄港地、就航船は度々変更された。こうして鬱陵島への航路は、主として隠岐汽船－朝鮮郵船－朝鮮汽船－西日本汽船により運営され、生活の維持及び産業振興など、近代化促進の大きな原動力となった。また、日韓併合以前より鬱陵島では、朝鮮人と日本人の間に密貿易を介した経済的信頼関係があり、併合後も融和が生まれる風土があった。

鬱陵島は隠岐島と同様に離島であり、隠岐島と比較的緯度も近く、気候パターンも相似し、季節的違いはあるもののスルメイカの回遊コースにあたり、さらに漁場が近い（近年は異なるが）など、イカ産業にとっては好条件の島であった。隠岐島からの漁業従事者が鬱陵島に居住する様になったことが契機となり、積極的とはいえないものの、一定の距離を保ち限られた空間のなかで、スルメイカを介して相互に補填し合う共生が始まり、鰻の加工技術や漁法などが伝播し、鬱陵島のこんにちのスルメ産業の礎となった。

キーワード 鬱陵島、隠岐島、尾吼鰻（ピコウスルメ）、イカ漁、鬱陵島郵便所

(MORISU Kazuo)

43 この様な話は島根県浜田でもあり、明治 45 年 5 月、五人乗六トン位櫓船二隻で浦郷を經由して鬱陵島チンサキに行き 10 月ごろまで四五湊沖合で烏賊をとっている。注 41 に同じ。